

成実涅槃学の断惑論

—菩薩と二乗の行位の接点を中心として—

魏 藝 WEI YI

要旨

本稿は、南朝期に活躍する中寺法安をはじめ、梁の三大法師と呼ばれる開善寺智蔵や莊嚴寺僧旻などの断惑論（十地断伏義¹十の各修行段階で煩惱を断滅し、屈伏させる義）を取り上げ、成実涅槃学の断惑論を究明することを目的とする。従来の研究では、成実涅槃学の諸師の著述がほぼ散逸しているため、彼らの思想についてはよく分かっていない。そこで本稿では、敦煌文献羽二七一『不知題仏経義記』、『大般涅槃経集解』、『大乘四論玄義記』などの文献を用い、第七地（遠行地）で断じる煩惱に焦点をあて、法安・智蔵・僧旻の断惑論の一端を明らかにする。

まず、見諦惑・思惟惑を『勝鬘経』の四住地惑と同一視する法安の煩惱論を確認した。法安は第六地までに四住地惑を断じ、第七地で習気を断じ、第八地以上では無明住地を断じると主張する。そして、法身・三界外浄土の獲得・変易生死を第八地に置くという断惑論が立てられる。

次に、「六地の末は必ず阿羅漢の功に齊しくする」という智蔵説を考察した。見諦惑・思惟惑を断じる二乗の修行と、四住地惑を断じる初地から第六地までの菩薩の修行は、同じ煩惱を断ち切る修行である。見諦惑・思惟惑と四住地惑は三界内煩惱の異名である。だから、阿羅漢は菩薩地へ転入する時、初地から第六地までの三界内の煩惱を断ち切る同じ修行コースを二度繰り返す必要がないのである。

最後に、第八地以上で断じる無明住地は、『成実論』の「五陰義」を基に色塵無知・心塵無知・集起無知の三種の無知説と解釈されることが明らかにした。

このように、地論文獻『金剛仙論』に説く初地で四住地惑を断じ、初地の法身・浄土説と比較すると、第六地で四住地惑を断じ、第八地の法身・浄土説は成実涅槃学の断惑論の特色であると窺える。

キーワード…成実涅槃 十地断惑 無明住地 梁三大法師 地論

一、はじめに

本稿は、南北朝期に活躍し、一般に梁の三大法師¹と呼ばれる開善寺智蔵（四五八—五二二）や莊嚴寺僧旻（四六七—五二七）をはじめ、それ以前の中寺法安（四五四—四九八）などの断惑論（十地断伏義²十の各修行段階で煩惱を断滅し、屈伏させる義）を取り上げ、彼らの教学を南北朝における修道論の展開史の上に位置付けることを目的とする。というのも、当時の研究課題であった十地からなる修行階位の展開に関して、特に煩惱の種類やそれを断ち切る行位については、成実・涅槃・地論や、その後の三論・天台などにおいて多数の異説が提示され、精緻な断惑論が展開されていくからである。

慧均（生卒年未詳、百済出身）⁴撰『大乘四論玄義記』⁵（以下、『四論玄義』と略称する）に説かれるように、十地断伏義には成実論師の莊嚴寺僧旻などの義、そして菩提流支（？—五〇八—五三五—？）や勒那摩提（？—一五〇八—五一—？）⁶がそれぞれ訳出した『十地経論』に基づく義、この二つの系統がある。慧均のいう成実論師の僧旻は、江南の成実涅槃学（また涅槃成実学）の代表と見なされる人物である。⁷また、梁

の三大法師乃至それ以前の諸人師の教学の特徴は、『成実論』（論）と『大般涅槃經』（經）という二つの基盤から成っている点にあり、そこに既存の諸経論を加えて研究・整理を加えていくことにある。更に、成実涅槃學は、中国江南仏教を起点に、朝鮮半島及び日本にまで伝播したことが明らかとなっている。しかし、成実涅槃學の諸師の著述はほぼ散逸しているため、残念ながら彼らの思想についてはよく分かっていない。

そこで本稿では、「六地与羅漢齊功」の理論を手がかりとして、敦煌文献羽二七「不知題仏経義記」（擬題。以下、『義記』と略称する）、『大般涅槃經集解』（現存唯一の南本『大般涅槃經』の注釈書）、『玄義』などの文献を用い、第七地（遠行地）で断ち切られる煩惱に着目することで、法安、智蔵、僧叟の断惑論の一端を明らかにしたい。このような考察を通して、阿羅漢位に煩惱を断ずることと第六地菩薩の功績が等しいという理論、そして第七地における断惑論の特色、これらを明確にすることが出来ると考える。

二、『成実論』と『勝鬘經』を繋ぐ煩惱論

成実涅槃學の断惑論は、羽二七一『義記』卷二の「中寺法安法師解十地義」（法安の講義録。以下、「十地義」と略称する）が特徴的である。『高僧伝』卷八（大正五〇・三八〇上）の法安伝によれば、法安の生卒年は四五四―四九八年であり、南齊の永明年間（四八三―三九三）から卒年四九八年まで健康の中寺に住した。

最初に法安の断惑論に触れた研究は、張文良「南朝十地學の側面―法安の十地義解釈を中心とする―」（『印度學仏教學研究』六二（二〇一四年））である。張文良氏は、惑（煩惱）と忍（智慧）、十地と断惑（悟り）の関係を概観した上で、根本煩惱を断ち切ることによ

り、枝末煩惱も同時に断滅する点を頓悟と結び付けて論述した。張氏の研究は重要であるが、法安の煩惱論が『勝鬘經』だけを所依とする、という解釈は適切ではないように思う。既に別稿で触れたが、法安は『成実論』と『勝鬘經』との研鑽に基づいて、三惑（見諦惑・思惟惑・無明住地惑）と三忍（信忍・順忍・無生忍）と華嚴十地との対応関係が立てられる。そして、智蔵や僧叟は法安の見解を継承しているのである。

しかし拙稿において解決できなかった課題が二つある。一つは、第七地での断惑論の特異性、つまりは「二国中間義」に触れられなかったという問題である。もう一つは、僧叟がいう『成実論』の三種無知（色塵無知・心難（塵）無知・集起無知）を『勝鬘經』の無明住地とどのように統合するのかという問題である。本節はその問題を解決するための準備作業として、まずは『成実論』の煩惱論と『勝鬘經』の煩惱論との関係を確認したい。

「十地義」は法安の講述部分と問答部分の二つから構成される。問者は靈味寺宝亮（四四四―五〇九）、天安寺智蔵（≡開善寺智蔵）、祇桓寺慧令（生卒年未詳）、靈基寺光泰（生卒年未詳）の四師である。この講義録では、三惑と二惑という二種の煩惱論が述べられている。まず三惑論を確認しておきたい。

行者之惑、大判有三。一者最重、能潤惡業、受三途之生、即經論所謂見諦惑也。二者次重、能潤善業、能受人天之生、即經論所謂思惟惑也。三者最輕、能潤變易之生、即『勝鬘經』所謂無明住地惑也。（羽二七一・一〇〇）

ここでは業の善悪と果報（生を受ける）の軽重に基づいて、煩惱を分類している。すなわち、三途（地獄・餓鬼・畜生）への転生を招く惡業

の煩惱は見諦惑（見諦道〔見道〕で断滅すべき煩惱）、人天への転生を招く善業の煩惱は思惟惑（思惟道〔修道〕で断滅すべき煩惱）、三界の輪廻を離脱する変易生死（下化衆生のため各趣への転生を自由に交える）の煩惱は『勝鬘經』に説く無明住地惑である。これは、見諦惑・思惟惑・無明住地惑の三惑、或いは惑の三重ともいう。惑は煩惱の同義語である。ちなみに南北朝期では、惑・障・縛・使・漏・纏などが煩惱の同義語として通用されている。見諦惑・思惟惑は『成実論』に基づき、¹³無明住地惑は『勝鬘經』を根拠にしているが、無明住地は『成実論』とも無関係ではない。後述するが、無明住地は『成実論』「無明品」の五陰義（色・受・想・行・識）に相当すると解釈されるようになる。¹⁴

一方、宝亮と法安の問答は、『勝鬘經』に説く四住地と無明住地を中心に、次のような二惑論を展開している。すなわち、

靈味宝亮問曰、惑心之起、為正惑一境、為通迷万法。

答曰、惑大判二種、一謂性障、一謂称起。性障者、直是無明障解而已、即無明住地惑也。称起者、就此惑上更起重惑、即四住地惑也。語無明住地、則通迷万境。論四住地惑、則随心所取、如顛彼不此、則正在一法。¹⁵

（羽二七一・一一）

と述べられるように、法安は『勝鬘經』の無明住地と四住地（見一處住地・欲愛住地・色愛住地・有愛住地）に基づいて、¹⁶性障（本性としての障り）と称起（「起」と称する二種煩惱）という二種煩惱を説く。すなわち、性障とは直に智慧に対して障害となる無明のことである。これは無明住地惑に他ならない。称起とはその無明住地惑の上に更に重い煩惱を起すことであり、四住地惑に他ならない。

そもそも『勝鬘經』は住地と起煩惱の二種煩惱を説きながら、住地が

種子（心に蓄えるにすぎず、心と結合していない）であり、起煩惱が心と結合する現行であり、無明住地は四住地や起煩惱とも異なる¹⁷という。しかし、法安は四住地を称起（起煩惱）とし、つまり四住地は種子としての煩惱ではなく、現に生起した煩惱と見なしていたことが前掲の資料から窺える。地論文献『教理集成文献』P二九〇八（北魏洛陽期、四九四〜五三四年）¹⁸にも四住地を現に生起した煩惱と見なす説が見られることから、¹⁹それに先行する法安の見解は注目されよう。²⁰

また、三惑も二惑に共通して無明住地惑が採用されていることにも注意が必要である。加えて、三惑のうちの見諦惑・思惟惑（『成実論』）と二惑のうちの四住地惑（『勝鬘經』）もまた対応関係にあると考えられる。

以上を踏まえると、法安は三惑で三惑を対治し、これを十地の修行段に取り込んでいたといつてよい。拙稿を参考にして要約してみよう。²¹すなわち、「初地（歡喜）・第二地（離垢）・第三地（明）は信忍であり、見諦惑を断ち切る。第四地（炎）・第五地（難勝）・第六地（現前）は順忍であり、思惟惑を断ち切る。第七地（遠行）は無生法樂忍であり、見諦惑・思惟惑の習気を断ち切る。第八地（不動）・第九地（善慧）・第十地（法雲）は無生忍であり、無明住地惑を断ち切る」となる。

また、前述の三惑ではなく、二惑の観点からこれを理解すれば、初地から第六地までは四住地惑を断じ、第七地で四住地惑の習気を断じ、第八地以上で無明住地惑を断ち切ると考えられるであろう。

三、法安による第七地の断惑論

前節では、『成実論』と『勝鬘經』に基づく二種（三惑・二惑）の煩惱論を確認した。そこで本節では、第七地で断ち切る煩惱に関わる「淨

穢二国土中間の義」について検討する。まずは智蔵と法安との問答から見てみることにする。(傍線は筆者による、以下同)。

(羽二七一・一三)

天安智蔵問曰、説煩惱三重、可以三忍別諸地。今遠行独立云治二国之間、若以三重惑弁問義云何。

答曰、所謂三重、就其輕重也。此三重中、前二重同是称起、俱惑三界、所以通謂穢。八地以上、称起已止、法身自在、所以称为淨国。法愛者、猶是称起之余、故障翳法身未起、故不在淨国、已勉三界故、又非穢国土、居淨穢之中故、問義以生。²²

(羽二七一・一二―一三)

煩惱の三重とは上掲した見諦惑・思惟惑・無明住地惑のことである。

第七地の遠行地で断ち切る煩惱に関する智蔵の問いに対して法安は、見諦惑・思惟惑を称起と見なし、つぶさに三界に迷うので、それ故に全て穢れた〔地〕と言ひ、傍線で示した第八地以上は法身が自在となり、称起(煩惱も習気)も断ち切られているので、淨国となると答えている。

三界内の煩惱としての見諦惑・思惟惑(三惑の前二者)の背景に四住地惑(二惑の前者)が意識されていることも読み取れよう。

最後に、第七地で断ち切る淨・穢二国中間の煩惱論が解説される。

云離①四住之極細及勉此穢域、斯則可也。便令人彼淨境、事則不然。何以言之。既有余分必須窮断、豈得扼越便登淨境。若須識其果相、当試言。夫四住地惑繫縛三界。若能尽之、則永入涅槃。所謂中間之惑、不能留之也。②大士持以慈力、以之受生、生即为物、豈得超離三界。但以因非繫法故、果亦非繫。非繫而生故、淨穢所不摂耳。『地経』云、「如転輪王見諸貧苦、王雖无之、而猶是人身」。

推此言之、則七地之果猶在三界、但不繫故、為中間義也。²³

經典からの引文について省略するが、右に見られる『地経』(『十地経』)は『華嚴経』卷二五「十地品・第七地」、または『十住経』卷三

「遠行地第七」からの引用であろう。さて、傍線部①で示したように、四住地惑の余分(習気)を完全に断滅すれば淨境に登るといふ。傍線部②で強調したように、第七地の菩薩は慈悲の因力で衆生を教化するため、三界内に受生するが、淨・穢の何れにも摂せず、淨穢の中間となる。また、前述したように、見諦惑・思惟惑を第六地までの断ち切る三界内の煩惱とし、穢れた〔地〕となり、第八地以上は淨国となる。こうして、十地の修行段階を「穢」「淨穢の中間」「淨」の三処に分けて、それぞれ初地から第六地まで、第七地、第八地以上に対応させることが窺える。

また、法安より前世代の法瑤(約四〇〇―四七五頃)も『大般涅槃経集解』の中で「制十地为三住处」と述べ、六地以内が三界内の穢国土、第七地が非淨非穢、第八地以上を「相心をすべて尽くす淨国」であると主張している。²⁵このような見解は当時の仏教界に流通していたと推知できる。羽二七一『義記』には、法瑤の記述がなかったが、『大般涅槃経集解』には、法瑤、法安の見解が共に記されている。²⁶このため、第六地までは三界内の穢土、第八地以上が三界外の淨土であると見ていたことが知られるのである。²⁷

以上、第七地の「淨穢二国土中間の義」を確認してきたが、本稿の目的である見諦惑・思惟惑と四住地惑との対応付けは如何であろうか。なんといいても、習気を断ち切る第七地は、三界内外・淨穢二土・法身生起の重要な区切り目である。注目すべきは、第六地までは三界内の煩惱

を断ち切ることである。但し、法安の「十地義」には、二乗の修行を証得する阿羅漢位と、菩薩の修行との行位関係が説かれていない。どころか、智蔵に至ると、二乗の修行を証得する阿羅漢位と第六地の菩薩は、同じく三界内の煩惱を断ち切る断惑論が展開されていくようになる。智蔵は法安の「十地義」に出席した一方、彼も『十地経』を講義したが、講義録の具体的な内容は現存しない。慧均の『四論玄義』や灌頂の『大般涅槃経疏』などに智蔵の断惑論が引用されている。ここで節を改めて智蔵の「六地の末は必ず阿羅漢の功に齊しくする」を考察する。

四、六地と阿羅漢の断惑について

第七地の断惑論として、「六地之末必与羅漢齊功」を手がかりとなる。以下、二乗の修行と菩薩の修行の関係について言及してみたい。『四論玄義』には智蔵の見解が次のように引用されている。

開善等云、六地之末、必与羅漢齊功、故無色結尽。如『瓔珞経』意也。又即知五地色界思惟尽也。²⁹（『四論玄義』二七〇頁）

「六地の末は必ず〔阿〕羅漢の功に齊しくする」という智蔵説は、『菩薩瓔珞本業経』（中国成立）³⁰の「阿羅漢〔秦言過三有、遠行地〕」（大正二四・一〇一一中）を用いて、阿羅漢位を第七地遠行地に結び付けることによって成立したという。

『四論玄義』の本文はとても短いものであるが、内容としてはきわめて重要である。なぜならば、二乗の修行と菩薩の修行の二つがここで接続する可能性を秘めているからである。換言すれば、二乗が煩惱を断ち切って証得する阿羅漢位は、仏果に至るまでの修行プロセスの、どこに

位置付ければよいのかという問題と関連する。³¹これは三乗と一乗の修行階梯の問題とも無関係ではない。一般的に、一乗（大乘）では凡夫↓声聞↓縁覚↓菩薩（華嚴十地）↓仏という階梯的、そして発展的關係を想定する。いわば声聞・縁覚は阿羅漢位の後、次のステージとして菩薩地の初地に移ることになる。しかしながら、南本『大般涅槃経』の注釈書である『大般涅槃経集解』に、「四依品」の注釈をめぐって、須陀洹・須陀含・阿那含・阿羅漢の四果と菩薩十地の対応付けが見られる。また、先行研究によって、僧宗と宝亮の大小乗行位の対応付けも明らかにされている。³³要約すれば、『成実論』所説の四念処・四善根の凡夫位を『涅槃経』注釈の住前三十心の内凡夫に対応し、見諦道の十五心を初地から五地までに対応し、思惟道の須陀洹果を六地に対応し、須陀含向・果と阿那含向・果と阿羅漢向・果の三つをそれぞれ七地、八地・九地、十地に対応するとする。

その他、『四論玄義』では、僧旻が『十住毘婆沙論』を引用して、須陀洹と初地菩薩との関係について述べている。³⁴要するに、四果（二乗）と菩薩十地（菩薩）とは、階梯的な関係ではなく、並列的な関係であるという解釈もあったのである。

そして、『大般涅槃経集解』には、二乗と菩薩における煩惱の類似性が見られる。

宝亮曰、羅漢断三界結尽、而習氣未除。以類十地菩薩、断色心塵障乃尽、而色心集起之源未断。³⁵（大正三七・四三六下）

宝亮は、阿羅漢が断じ尽くせない習気を十地の菩薩が断じ尽くせない色心（物質と精神の煩惱の）集合生起する根源になぞらえている。次節で色心集起を詳細に述べるが、ここで注目すべきは、阿羅漢位に達したと判

断する基準が三界〔内〕煩惱を断ち尽くしている点にあることである。³⁶
宝亮も智蔵も法安「十地義」に同席した問者であったが、前掲した『四論玄義』、つまりは智蔵のいう阿羅漢に等しい六地というのは、華嚴十地の第六地を指すのであろうか。まず、般若十地において阿羅漢位は已弃地（第七段階）・辟支仏地（第八段階）・菩薩地（第九段階）に相当し、³⁷第六地ではないと考えられる。

次に華嚴十地との関連を見てみよう。智顛の弟子である章安灌頂（五六一―六三二）が伝えた僧旻・智蔵の断惑論について、湛然（七一―七八二）の再治した灌頂撰『大般涅槃經疏』では、以下のよう

言「三種破煩惱」者、旧有二解。

一云、二国煩惱、見思二惑（惑）是界内穢土煩惱。習氣是两国中間。淨土煩惱無明、是界外煩惱。七地菩薩断二国中間煩惱、莊嚴所用。

二解云、見諦為一煩惱、思惟為二煩惱、習氣是三煩惱。無明元品品数与習氣是同、故不別說。初地至三地断見諦、四地至六地断思惟、七八地者並断習氣無明、此是開善解。³⁸（大正三八・一七九中）

言うまでもなく、ここでの「二国中間の煩惱」は法安の「二国中間の義」から継承した用語である。第一の僧旻説は法安説と一致している。すなわち、見諦惑・思惟惑が穢土の煩惱、第七地で断ち切る習氣が淨・穢二国中間の煩惱、無明住地が三界外の淨土の煩惱である。ところが、第二の智蔵説（傍線部）はやや見解を異にする。智蔵は見諦惑・思惟惑・習氣の三種煩惱を説き、無明元品と習氣が同じであると主張している。無明元品と習氣については後述する。ともかく僧旻と智蔵では、第

六地までは三界内の煩惱を断ち切ることで共通している。

なお、六地菩薩が阿羅漢の功績に等しいことの理論的基盤は、『成実論』と『勝鬘經』の煩惱論を合わせた考え方である。法安は三界内の煩惱として、見諦惑・思惟惑を四住地惑に該当すると主張していた。また、『四論玄義』の時点では、見諦惑・思惟惑を二乘の煩惱とし、四住地惑を菩薩の煩惱と見なす説が定着している。『四論玄義』では、「彼云、四住地惑与見思惑、無別異体、大小乘名為異耳」（二七二頁）と述べ、見諦惑・思惟惑（小乘「成実論」）と四住地惑（大乘「勝鬘經」）の二つは大乗で煩惱の名称が異なるだけで、実質、同じ本体であると説いている。要するに、六地と羅漢の功績が等しいというのは、見諦惑・思惟惑を断ち切る阿羅漢を目指す二乗の修行と、四住地惑を断ち切る六地までの菩薩の修行のことであり、両者は同じ煩惱を断ち切る修行といえよう。

そればかりか。『四論玄義』は念退（三種退転の一つ）⁴⁰の「七地菩薩愛仏功德」を説明する際、智蔵と僧旻の見解に言及している。まずは智蔵説を確認してみよう。

問、此菩薩行已深、何意起此念耶。

答、論師説不同。一、開善門徒云、引接名字、明之有二乘。故

『經』云、「有三種意生身」。何者空解万行相資。乃同二乘人不修万行、云何得空解、断三界惑、出三界外耶。又此菩薩雖断正使已尽、始出界内、未得空有並觀。鈍根菩薩、有時起愛仏功德、或時樂没空時也。⁴²（『四論玄義』二九三頁）

〔小乗の機根の衆生を〕引導するため、⁴³名字をかりて（權〔方便〕として）声聞・縁覚の二乗の教えが説かれる。それ故、〔勝鬘〕經に〔阿羅漢に生まれる・辟支仏に生まれる・大力菩薩に生まれるという〕

三種の意生身があるという。智蔵一門は主張（名字二乗）している。⁴⁵
一方、僧旻一門の学説（実行二乗）は以下の通りである。

二者、有実行二乗家。即是莊嚴等門徒云、不唯鈍根、無方便菩薩、
愛仏地功德、亦是声聞等二乘断三界正使尽、往生反易生死時、聞仏
無量功德、即生愛仏地功德。又此菩薩正就有行明之、初地至六地、
猶有退転、以正使未尽、万行難精故。…中略…報恩亦同此説。⁴⁶
（『四論玄記』二九三頁）

僧旻一門は、実の二乗があると説いている。方便のない鈍根菩薩は仏地の功德への愛着が生じることだけではなく、二乗もまた三界内の煩惱を断じ、変易生死の時、仏地功德への愛着が生じるといふ。前掲した灌頂所伝の僧旻説では、見諦惑・思惟惑が三界内の穢土煩惱であり、第七地の菩薩が習気（法執）を断ち切るというものであった。要するに、二乗は二乗の修行で三界内の煩惱を断ち切り、第六地までの菩薩は、菩薩の修行で三界内の煩惱を断ち切る。両者は並列的關係で考えられているのである。

以後、名字二乗と実行二乗は『法華経』の一乗思想と絡み合い、三乗と一乗の教えのどちらが方便（権）で、どちらが真実（実）かであるのかという問題となって議論されていく。『四論玄義』の記述によれば、智蔵などは「声聞、辟支仏者、是仏方便…中略…与一乗之果、帰於仏地」といふ、一切皆成仏説ともいえる主張を展開している。⁴⁷南北朝期における一乗・三乗問題の検討は別稿に譲りたい。⁴⁸

ここで明らかにしたいのは、名字二乗にせよ、実行二乗にせよ、見諦惑・思惟惑を断ち切る二乗の修行と、四住地惑を断ち切る初地から第六地までの菩薩の修行は、実質的に三界内の煩惱を断ち切る同じ修行コー

スと見なされている点である。換言すれば、三界内の煩惱を断じた阿羅漢は、菩薩地へ転入する時、初地から第六地までの三界内の煩惱を断ち切る同じ修行コースを二度繰り返す必要がないのである。

こうして、法安の「淨穢二国土中間の義」を基軸として、四住地惑（三界内の煩惱）を断ち切ることや、法身・三界外浄土の獲得・変易生死を第八地とすることなどの理論が構築され、何れも高い修行段階で解釈していったと考えられるのである。重要なのは、日本で聖徳太子撰と伝える『勝鬘経義疏』にも、「七地以還断結、与二乗齐、同出三界」（大正五六・四中）とあり、凝然（二二四〇―一三三二）撰『勝鬘経疏詳玄記』（太子疏の注釈書）にも、「実至八地、応受变易」（『大日本仏教全書』巻四、一四二頁）と論じられている。このような見解のルーツは南朝成実涅槃教学にあると見てよいと思う。⁴⁹

ところで、『十地経論』の研鑽に伴い、十地と断惑論の考えが以下のように変化していく。『金剛仙論』（五三五、菩提流支一門の講義録）には、初地菩薩は永く四住・習気及び無明麁品を断ち切る（大正二五・八〇四中、同・八三八上）と述べられ、この説は慧遠に継承されていく。⁵⁰その後は、初地で永く四住を断ち切る説に伴い、初地の法身説⁵¹と、初地以上の三界外の第一義莊嚴浄土説も提唱されていくようになる。⁵²ちなみに、『金剛仙論』には第七地で三界煩惱を断じ、小乗（阿羅漢）と同じと捉える説への批判が見られる。⁵³

こうして、四住地惑及び習気を断ち切る菩薩位としては、成実涅槃学の第六地・第七地（遠行地）と、『十地経論』以後の初地（歡喜地）という相違が窺えるのである。

以上は第六地までと第七地で断ち切る煩惱論を確認した。最後に、第八地において断ち切られる三種無知（無明住地）について、僧旻説を考察したい。

五、三種の無知と無明住地

僧旻も『十地經』を講義したが、講義録の具体的内容は現存しない。⁵⁴ 但し、『四論玄義』に僧旻説が述べられている。僧旻は見諦惑・思惟惑・習氣・無明住地惑（無知）の四惑論を説いて、十段階で四惑を伏断すると論じた。⁵⁵ 四惑といっても、第七地で断ち切る習氣を一つとして数えの相違以外、法安の見諦惑・思惟惑・無明住地惑を断じる十地の段階とほぼ一致している。法安の「十地義」に煩惱を伏する十つの段階を説いていない。加えて、僧旻は法安の講義には見られない三種の無知を用いて、無明住地惑を解釈している。

無明住地、其力最強、能鄣深行、断之最久。且約事相、分為三別。謂色塵無知以為上品、心難無知以為中品、集起無知以為下品。『誠論』三無知、互有麤細。今以從多遂事故、如向説也。

（『四論玄義』二六九頁）

僧旻は、無明住地を事相の立場から、「色塵無知」「心難（塵）無知」「集起無知」の三つに分けている。なお、三種無知は『實論』⁵⁷に基づく学説であるまた、この三種無知が早期の地論文獻 P 二一八三V、P 二九〇八にも採用されている。⁵⁸ 興味深いことは、P 二一八三V（背紙）にも三種無知が示されていることである。これと僧旻説を比較すれば、以下のようなことになる。

P 二一八三V・八地正断色塵無知、九地断心塵無知、十地断色心集起無知。色心因果尽於此矣。（『藏外地論宗文献集成』一〇〇頁）

僧旻説・八地断色塵無知、九地断心難無知、十地断集起無知。

（『四論玄義』二七〇頁）

これを見れば分かるように、「心塵」と「心難」の文字が相違する以外、三種無知を断ち切る行位について、両者は完全に一致するのである。ところが、『成実論』には、色塵無知、心塵無知、集起無知が明確に説かれていない。では三種の無知がどのように形成されたのであろうか。これについて、『成実論』「無明品第一百二十七」には、次のように説かれている。

又『經』中解明名義、謂有所知、故名爲「明」。知何等法。謂色陰無常、如実知無常。受、想、行、識陰無常、如実知無常。与「明」相違、名爲「無明」。然則不明如実、故名無明。⁵⁹

（大正三三・三二二下）

ここは明と無明とを対概念として解釈する箇所である。冒頭に説かれる色・受・想・行・識は五陰（五蘊）を、無明は五陰の無常を如実に知らないことを意味する。大竹晋氏は、南朝の僧亮（道亮、四〇〇―四六八頃）説と北地の P 二一八三を例として、五陰を色・心の二法（物質的存在と精神的存在の二種）に集約する説は、南朝で始まった後、北朝においても広まったことを指摘している。⁶⁰ では五陰義がいかに色・心の二法に集約されるのか。これを考えるためには、僧旻と同様、三種無知を論じる P 二一八三（正面）の五陰義が⁶¹大いに参考となる。

下『論』文言五受陰。陰雖有五、心色収尽。若色在心存、大苦聚集、除心遣色、始会安樂。故知五陰莫非遍惱、以為苦体也。…中略

…。夫長寢之徒、所以下沈生死、良由五法積聚、覆弊明解、以之為陰。陰別不同、所以立五。就此五中、大判有二。一者是色、二者是心。色是頑礙、但能生苦、唯其制一。心之為用、可重可貴。断惑生解、備起善惡、功由於心、所以立四。⁶²

（『藏外地論宗文獻集成』七八一八〇頁）

ここは『成実論』⁶³の五陰義を解釈した箇所である。要点としては「五陰は大別すると二種である。一つは色、もう一つは心である。色は物質としてのさまざまであり、苦を生じる原因なので一つの色陰となる。一方、心（精神）の用（はたらき）は、尊重すべきものである。なぜなら、煩惱を断ち切り智慧を生じるからである。また、つぶさに様々な善悪の業を引き起こす。その功は心に基づくので、受・想・行・識の四陰に分類して立てるのである」となる。このような色・心の二法に集約する五陰義が、色塵・心塵と関連付けられるようになっていく。色塵無知は色（色陰）の無常を如実に知らない無明、心難（塵）無知は心（四陰）受・想・行・識の無常を如実に知らない無明ということである。なお、集起無知については、『大般涅槃經集解』の宝亮説が参考になる。

宝亮曰、羅漢断三界結尽、而習氣未除。以類十地菩薩、断色心鹿障乃尽、而色心集起之源未断。（大正三七・四三六下）

傍線部には、十地菩薩は色心の鹿煩惱を尽くすが、色心の集起の根源をいまだ断じないと説いている。つまり「集起之源」は、「集起無知」の類似表現であり、同義語と考えられる。ともかく、無明住地惑における三種無知が『成実論』の五陰義に基づいて展開されたことが、これによって明確になったと考える。

ところで、第七地で断ち切る習気と第八地以上で断ち切る無明とについて、智蔵は見諦惑・思惟惑・習気の三つの煩惱を説き、無明元品の品数と習気の品数は同じで異ならず、七地と八地で共に習気と無明とを断ち切ると述べている（上掲した灌頂『大般涅槃經疏』所伝、大正三八・一七九中）。注目すべきは、「無明元品品数与習気是同、故不別説」とあることであろう。

それでは、無明元品とは何であろうか。吉蔵の『金剛般若經義疏』に智蔵説が引用されている。⁶⁴

約開善義、伏惑既周、又無明元品之惑、此最難伏、唯是窮学之心而能伏之、故至仏果、起仏智断之。以是義故、窮学之心名曰金剛。⁶⁵

（大正三三・八九下）

智蔵のいう無明元品は、十地で断ち切るものではなく、金剛心において屈伏させて仏智で断ち切るものが最後の元品惑であるようである。しかし無明元品と習気の品数については、吉蔵は特に何も言及していない。一方で、『四論玄義』には「開善門徒報恩等」（二七一頁）の説が次のように述べられている。

三、報恩云、…中略…。於七地已上所断伏惑、亦有三種性不同。一総痴無明住地九品。二無知九品。三習気九品。此三種性一除道所断伏也。恒沙上色塵等五種、即是無明・無知・習気性収之。所以只立三種性。⁶⁶

（『四論玄義』二七二頁）

報恩寺の法師（未詳）は、七地以上の段階で滅尽する惑は、総の痴無明住地、無知、習気という三つの性質があって、それぞれ九品に分けら

れるという。これは恐らく無明元品品数と習気とを同じとした智蔵説を継承しているであろう。注意すべきは、総癡無明・無知・習気は只だ三つの性質であり、三つの種類ではないと強調される点である。これは上掲した無明住地を性障とする法安説と関連させるようである。いわば、七地以上の菩薩は伏すると断する惑が一つ（法安のいう「性障」に相当するの）であると論じているといつてよい。

前述した通り、智蔵は名字二乗の主張者である。二乗の修行は、初地から第六地までの見諦惑・思惟惑を断ち切るのである。そこで、第七地以上になると見諦惑・思惟惑の習気しか存在しなくなり、だからこそ第八地以上の無明住地と習気とを合致させるようになったのであろう。

なお、智蔵一門による第七地以上の断伏義については、およそ次のような学説が立てられている。

若名目論之四種也。若断伏者、七地断恒沙上煩惱、則伏色塵無知。

八地正断色塵無知、則伏心難無知。九地正断心難無知、伏集起無知。十地正断集起無知、則伏無始無明也。余二種還在其中也。⁶⁷

（『四論玄義』二七二頁）

なるほど、名目の上から無明・無知・習気の三つの性質を色塵無知・心塵無知・集起無知・無明元品の四つに分けて、第七地から第十地までの断伏義が説明されている。これは「第七地で恒沙上の煩惱を断じ、〔兼ねて〕色塵無知を屈伏させる。第八地で正（主）に色塵無知を断じ、〔兼ねて〕心難無知を屈伏させる。第九地で正（主）に心難（塵）無知を断じ、〔兼ねて〕集起無知を伏する。第十地で正（主）に集起無知を断じ、無始無明（＝無明元品）を屈伏させる。余の二つ性質の習気・痴の無明がともに〔色塵無知・心塵無知・集起無知・無明元品の四

つの中）にたくわえる（だから並びに屈伏させ、断ち切る）」というのである。

ここでは十地で正（主）に集起無知を断じ、無明元品を屈伏させると述べられている。つまり、無明元品を断ち切るのは、十地より更に高い修行段階でなければならぬと裏付けている。だからこそ、吉蔵の『金剛般若経義疏』所伝の智蔵説は、金剛心で無明元品を屈伏させ、仏地に至って仏の智慧で断ち切ると説いている。しかしながら、金剛心に惑があるか否かについて、『四論玄義』と『大乘義章』の「金剛心義」の項目が見られる。これらの比較は今後の研究課題とする。

しかも、慧遠『大乘義章』の「二障義」には類似の三種無知説が述べられている。

一隠顕互論。七地已前、唯除煩惱。八地已上、滅除智障。如八地中淨仏国土、断除一切色中無知。九地之中、了物心行、滅除一切心行無知。第十地中、於諸法中、得勝自在、断除一切法中無知。此等皆是除事無知。

（大正四四・五六・三上）

あくまでも「二障義」について一解釈ではあるが、ここには四住煩惱を煩惱障とし、無明住地を智障としている。⁶⁸つまり、隠と顕を相対的に論ぜば、七地以前では煩惱障の四住地煩惱を除去し、八地以上は智障の無明住地を除去するというのである。また、第八地で色中（物質）無知を断ち切れ、第九地で心行（精神的）無知を断ち切れ、第十地であらゆる法（物質と精神的の）無知を断ち切ると述べられている。色塵・心塵から色中・心行への用語変化と、第七地で断ち切る習気を除けば、①第八地での浄土、②第八地から無明住地を断ち切る、③無明住地を色・心の二法に集約する三種無知説は、僧旻らの断惑論とはば一致している。

『大乘義章』はそれ以前の成実涅槃学の断惑論を取り入れたと考えられるよう。

以上、『成実論』の五陰義に基づく三種無知と、『勝鬘經』の無明住地との関係を明らかにした。しかし、無明・無知・習気の三種性については、いまだ不明な点も多い。それは、法安が水波の喩を用いて、無知（無明住地）と称起の関係を説明する点である。

又問、若以根本未尽、枝條猶起者、則金剛心時、称起方尽耳。

答曰、如波浪依水必在洋溢之時、川竭池涸、雖地中余濕、不能起浪。八地以上雖有无知、事同地濕、不復能生称起之惑。故金剛心時、无復可断也。
(羽二七一・一一一一)

水波の喩は何れの經典からの引用か明確に示されていない。また、地論文献P二一八三の「解断伏義」にも、「水以譬心、風況塵境、煩惱喩浪」と明示されている。⁶⁹ 推測の域を出ないが、『四卷楞伽經』からの転用である可能性がある。⁷⁰ 法安時代の南朝仏教では、唯識文献の『四卷楞伽經』は「断肉食」に影響があったと考えられる。⁷¹ こうしたことが、法安の水波の喩にも影響を与えたと考えられるのである。但し、これは唯識の影響であるか否かと断言できない。また、唯識説では習気は種子の別名である。⁷² 第七地で断ち切る習気・無明・無知を含めた、『十地論』以前の心識説の展開について検討する必要がある。

六、むすび

以上は、法安の「十地義」を中心に、僧旻、智蔵による断惑論の一部を明らかにした。従来、解明されてこなかった成実涅槃学教学の断惑論に

ついて、以下のようにまとめることが出来る。

① 成実涅槃学は、『成実論』の見諦惑・思惟惑を『勝鬘經』の四住地惑に該当する一方、『成実論』「五陰義」を基に色塵・心塵・集起の三種無知説と無明住地説とを融合させた煩惱論を展開している。

② 法安は、第六地までは四住地惑を断ち切れ、第七地で習気を断ち切れ、第八地以上は無明住地惑を断ち切ると述べ、それぞれ穢土・淨穢の中間・淨土となり、法身・三界外淨土の獲得・変易生死を第八地とするのである。『金剛仙論』の初地で四住地を断ち切れ、初地での法身と三界外淨土説と比較すると、第八地説は成実涅槃学の断惑論の特色であるといえよう。

③ 見諦惑・思惟惑にせよ、四住地惑にせよ、同じく三界内の煩惱であると見なされている。だから智蔵は第六地菩薩と阿羅漢の功績に等しいという理論を展開した。つまり見諦惑・思惟惑を断ち切る二乗と、四住地惑を断ち切る第六地までの菩薩修行とは実質的に同じ修行コースであるといえる。こうして、阿羅漢位の次のステージは初地歡喜地ではなく、第七地遠行地に入ることになった。

時代が下るにつれて、智顛説灌頂記『法華文句』に、次のように述べられている。

小乘大乘得入位人、誰不断惑未足定判。若言七地断無明者、非通又非別、乃是別接通意耳。
(大正三四・一三六下)

『法華文句』は、第七地で無明住地を断ち切る説(同智蔵説)が通教でもない、別教でもない⁷³と述べ、これを踏まえて別接通(通教の菩薩はより優れた別教に接入させる)理論を案出したのである。⁷⁴

一方、吉蔵撰『法華玄論』は、二乗修行と菩薩修行の劫数が異なる点

を根拠に、「若し二乗の断惑が六地に齊しいとはこの処有ることあり得ない」と批判している。¹⁵このように、南北朝期において断惑証理の修道論展開史上、成実涅槃学の断惑論は重要な位置にあるといえよう。

1 成実・三論の併習は宋・齊仏教思潮の一傾向として定着し、開善寺智蔵、莊嚴寺僧旻、光宅寺法雲（四六七―五二九）のいわゆる梁の三大法師と称された三人の巨匠が現れた。その後、三論教学を大成した吉蔵は『三論玄義』に「成実は是れ小乗にして大乘に非ず」（大正四・三下）と論じられた。平井俊榮監修『三論教学の研究』、春秋社、一九九〇年、「序篇」x・xi頁。

2 「断」は二種の説明がある。①羽二七「不知題仏経義記」卷二「中寺法安法師解十地義」に、「経云以下二智断上上煩惱。云何一念无漏、鹿細兼除也」（一一頁）という。これは『成実論』「断過百品第一百三十九」の「以下下智断上上煩惱、乃至以上上智断下下煩惱」（大正三三・三四中）からである。②『大乘四論玄義記』は「如経云、一念相應慧、断無量煩惱及習」（二七三頁）と伝える。これは『大智度論』の「用一念相應慧得一切種智、爾時一切煩惱習永尽以不生故」（大正二五・六五三上）からである。

3 「伏」の説明は『大乘四論玄義記』（二七二―二七三頁）に二箇所がある。

①又伏義解不同。一云如積伏也。二云如魚鱗伏也。三報恩云必須百品各各相翻伏也。②又依経論中、对除明義、亦有二種。一功德門明之、如施伏慳乃至定伏乱也。二者就智慧門明之、正見伏耶（邪）見、乃至觀因縁能伏痴等。不二而二、約假上假名說之也」。

4 慧均は百濟出身ともいわれる。伊藤隆寿「『四論玄義』に関する諸問題」、『駒沢大学仏教学部論集』四〇、二〇〇九年、四八―四七四頁。崔鉉植（山口弘江訳）「『四論玄義』と韓国古代仏教の再検討」、『東アジア仏教研究』八、二〇一〇年、七一―一〇五頁。

5 本稿は崔鉉植氏の校注本を用いる。崔鉉植校注・慧均撰『大乘四論玄義記』、仏光社、二〇〇九年。

6 第一明断伏義。略如「夢覺義」中釈也。今約地明之、十地義、成実論師推与莊

嚴家也。周齊二国、盛明十地義。此義從來雖盛明之、復後時菩提勒那西三藏来、翻「十地論」、功用由帰両師也。（『四論玄義』二六九頁）。

7 船山徹「地論宗と南朝教学」、荒牧典俊編『北朝隋唐中国仏教思想史』、法蔵館、二〇〇〇年、二三頁。石井公成「真諦関与文献の用語と語法―NGSMによる比較分析」、船山徹編『真諦三蔵研究論集』、京都大学人文科学研究所、二〇一二年、九五頁。

8 船山徹「梁の開善寺智蔵『成実論大義記』と南朝教学」、麦谷邦夫編『江南道教の研究』、京都大学人文科学研究所、二〇〇七年、一一―一三五頁。船山徹『六朝隋唐仏教展開史』、法蔵館、二〇一九年、八七―一二八頁。

9 石井公成氏によれば、『成実論』を主とする江南の成実三論並習派の教学も早い時期に高句麗に入っていた一方、「成実論師を反論する」攻撃的三論学派の思想もやや遅れて伝えられたと述べ、六世紀末から世紀はじめに高句麗より日本に伝えた仏教は、成実三論並習派のほうが主流となると推定されている。

金天鶴氏は、この意見を継承し、攻撃派でない百濟三論宗師慧慈、慧聡、観勒より聖徳太子に三論と成実に教えたと述べている。問題は、石井氏の指摘したように、これら（並習派と攻撃派）それぞれの教学の伝来時期と流行の程度である。石井公成「第二章仏教の朝鮮的受容」、鎌田茂雄編『講座仏教の受容と変容韓国編』、佼成出版、一九九一年、七一―一〇一頁。金天鶴「百濟道蔵の『成実論疏』の逸文」、『仏教学レビュー』四、韓国金剛大学校編、二〇〇八年、一六三―一八三頁。筆者も上掲した意見に賛成する。並習派にせよ、攻撃派にせよ、梁の三大法師及び前世代の法安・宝亮などによる仏教学の研鑽と蓄積を無視することができないであろう。

10 吉蔵撰『法華義疏』には「成論師不応言羅漢与六地齐功」（大正三四・五六四中）と批判されている。智顛說灌頂記『維摩経文疏』にも「阿羅漢断結、六地齐功、皆是位不退」（中統蔵一八・五八五下）と述べられている。

11 建元寺法朗撰とも考えられる。菅野博史「『大般涅槃経集解』の基礎的研究」、『東洋文化』六六、一九八六年、九三―一七三頁。（後に菅野博史『南北朝・隋代の中国仏教思想研究』に収録、大蔵出版、二〇一二年、三五―四二八頁）。

- 12 拙稿「中国南朝仏教の行位解釈に関する一考察―成実涅槃師を中心に―」、
『龍谷大学仏教学研究室年報』二四、二〇二〇年、四一―七四頁。
- 13 『大乘義章』卷二五・所言障者、隨義不同、乃有多種。或名煩惱、或名為使、
或名為結、或名為纏、或名為縛、或名為流、或名為垢、或名為取、或名為漏、
或名為垢、或説為惑、或説為障。如是非一、勞乱之義。（大正四四・五六一
中）。
- 14 『成実論』の「雜問品第一百三十八」〔論者言、一切煩惱多十使所撰、是故
当因十使而造論。十使者、貪・恚・慢・無明・疑及五見。問曰、諸煩惱中幾見
諦斷幾思惟斷。答曰、貪・恚・慢・無明二種、見諦斷思惟斷、余六但見諦斷〕
（大正三二・三三三上―中）や「法聚品第十八」の「見諦斷法者、謂須陀洹所
斷示相我慢及從此生法也。思惟斷法者、謂須陀洹、斯陀含、阿那含所斷不示相
我慢及從此生法也」（大正三二・二五二下）などに基づいて、見諦（見道）所
斷の煩惱と思惟（修道）所斷の煩惱を説くことになった。次の論考を参照。池
田將則「敦煌出土地論宗教理集成文献スタイン六一三V第二章「経辨五住地
煩惱義」にみられるアビダルマ教理について」、韓国金剛大学校仏教文化研究
所編『地論宗の研究』、国書刊行会、二〇一七年、三三三―三五六頁。
- 15 靈味寺宝亮は問う、惑心の起るとき、正しく一境（一つの認識対象）のみに
惑わんとするのか、万法（あらゆる存在の全て）に迷わんとするのか。
答える、惑は大別すると二種である。性障（本性として障り）と称起
（「起」と称する＝起煩惱）である。性障とは直に解（智慧）に対して障害と
なる無明のみであり、無明住地惑に他ならない。称起とはその（無明住地）惑
の上に更に重い煩惱を起すことであり、四住地惑に他ならない。無明住地惑
について述べるならば、それはあらゆる存在の全てに迷うのである。四住地惑
について述べるならば、それは心に随って取るので、顛倒して彼は此にあらざ
ると一法に迷うことになる。
- 16 『勝鬘經』…煩惱有二種。何等為二、謂住地煩惱及起煩惱。住地有四種。何
等為四。謂見一處住地。欲愛住地。色愛住地。有愛住地。此四種住地。生一切
起煩惱。起者刹那心刹那相。世尊。心不相應無始無明住地。世尊。此四住地
力。一切上煩惱依種。比無明住地。算數譬喩所不能及。（大正二二・二二〇
上）。
- 17 『勝鬘經』の煩惱論については、以下の研究に詳しい。中村元「維摩經・勝鬘
經」（現代語訳大乘仏典3）、東京書籍、二〇〇三年、一一九―一二一頁。大
竹晋「大乘起信論成立問題の研究―『大乘起信論』は漢文仏教文献からのパッ
チワーク」（以下「二〇一七b」と略記する）、国書刊行会、二〇一七年、
四二―四三〇頁。
- 18 地論文献P二九〇八の原題や抄写年代は不明であるが、北魏洛陽期における仏
教教理学の実録であると推定される。池田將則「教理集成文献P二九〇八」解
題、青木隆など編『感外地論宗文献集成』、韓国金剛大学校仏教文化研究所、
二〇一二年、一一四―一九頁。
- 19 地論教学において四住地を現行と見なす説は、次の論考を参照。大竹晋「地論
宗の煩惱説」（以下「二〇一七a」と略記する）、韓国金剛大学校仏教文化研究
所編『地論宗の研究』、国書刊行会、二〇一七年、一三七―一九〇頁。
- 20 四住地（現起）と無明住地（智慧を障る）の二つに分ける煩惱論は、慧遠撰
『大乘義章』にも見られる。
- 四住煩惱現起之結、發業招生、勞乱義強、偏名煩惱。異心之惑、与解別体、疎
而遠翳、障智微故、不名智障。無明闇惑、正達明解、親而近翳、障智義強、故
名智障。任性無知。非是現起、不能發業招集苦報、勞乱微故、不名煩惱。（大
正四四・五六二上）。
- 21 拙稿「二〇二〇」前掲書。
- 22 天安寺智蔵は問う、煩惱の三重は三忍を以て十地の各地に区別できると説くな
らば、今（第七地）の遠行地のみは「二国土の間の煩惱を対治する」という。
若し三重の惑を以て中間の義を論じるのは、いかがなものであろうか。
答える、煩惱の三重は煩惱によって引き起こされる業の軽重に基づいて述べた
ものである。この三重のうち、前の「見諦惑と思惟惑」二重は同じく称起
（起煩惱）であり、つぶさに三界（欲界・色界・無色界）に迷うから、それ故
に全て穢れた（地）という。第八地以上は称起が既に止滅してしまつて、法身
が自在に（働く）から、それ故に清浄な国土となる。法愛（法執）とは、まだ
称起の余力（習気）として残っているので、それ故、さわりがあることによつ

て法身がまだ生じず、それ故、淨国に在らずとも、既に三界から離れているから、更に穢れた国土でなく、淨と穢の中間に居るから、中間という意味で生じるといふ。

- 23 ①四住地惑の微細を離れ、そしてその穢れから免れることが可能であるといっても、清浄な境界に入らせるのかいえば、そうでもない。それは何故か。完全に断滅すべき(煩惱の)余分(習気)がまだ残っているから、どうしてその障り(垢)を超越して清浄な境界に登ることができようか(できない)。其の果報の相(ありさま)より説明する必要があるならば、試みに(以下のように)説明してみよう。そもそも四住地惑は三界に縛られている。もしそれを断ち滅尽することができるならば、永く涅槃に入る。いわゆる中間の惑が(残ったまま)停留することはできない。②大士(菩薩)は慈悲の力を保ち、そしてその力によって(衆生を教化するために)受生し、受生すれば物(衆生)となり、どうして三界から離脱できようか(できない)。但し、(慈悲力という)原因は存在に束縛されないから、結果も束縛されない。束縛によって生ずるわけではないので、清浄にも汚穢にも含まれないのである。『十地経』に「例えば転輪王が貧しく苦しむ人々を見ると、王自らにはそれ(貧苦)がないのに、(自分を)その(貧苦の)人と同じと見なすように」といふ。ここから推測すれば、七地(菩薩)の結果は三界の中にあるが、しかし三界に束縛されないのだから、それ故に中間という意味なのである。
- 24 求那跋陀羅訳『華嚴経』(「十地品」)の経文は九割以上鳩摩羅什訳『十住経』の経文を踏襲していると指摘されている。大竹晋『十地経論I』(『新国訳大蔵経』、积経论部一六)、大蔵出版、二〇〇五年、三四頁。ここは『華嚴経』「十地品」の経文を例示している。
- 解脱月言、第七菩薩、為是淨行、為是垢行。金剛藏言、…中略…。譬如転輪聖王乘宝象、遊四天下。見諸衆生、貧窮苦恼。王雖無苦、而未離人。若捨王身、生於梵世、遊千世界、現大威力。爾時乃名離於人身。(大正九・五六二上)。
- 25 法瑠曰、制十地为三住处。三住处者、六地已還、未出三界、穢国一住处。七地是二国中間、非淨非穢、为一住处。八地已上、相心都尽、名為淨国、为一住处。(大正三七・四三七上—中)。

26 涅槃乃中正天竺音也。名含衆義。此方無以為訳。法瑠、曇濟、宝亮、曇愛、智秀、法智、法安、曇准悉同。(大正三七・三八〇中)。

27 「十地義」には浄土の説明がない。羽二七一「義記」卷三「上定林僧柔法師解浄土義」には、「故『経』云、劫火所焼時、我浄土未毀。斯其明矣。(一七頁)と述べられている。『法華経』に説く靈山积迦浄土であろうかと推測される。

28 「統高僧伝」智感伝・凡講『大小品』『涅槃』『般若』『法華』『十地』『金光明』『成実』『百論』『阿毘曇心』等。(大正五〇・四六七中)。

29 智感等は、「菩薩の第」六地の末は必ず阿羅漢の功に齊しくする、だから無色界の煩惱は滅尽する。これは「菩薩瓔珞本業経」の意図と同じである。更にまた、「菩薩は」五地で色界の思惟道の煩惱が滅尽することも推知できる。

30 船山徹「疑経『梵網経』成立の諸問題」、『仏教史学研究』三九、一九九六年、五四—七八頁。

31 この問題の端緒はインド仏教の修行体系—大乘と小乗の二つ系統に帰着する。『大智度論』に「如来煩惱及習都尽。声聞、辟支仏但煩惱尽、而習氣有余」(大正二五・六四九下)と説かれるように、声聞・辟支仏の二乗は煩惱を尽くすが、習気を残している。大乘仏教では、阿羅漢から仏果を得るまで、習気を断ち切る菩薩修行が必要である。インド仏教の修行体系について、次の論考を参照。船山徹「仏教の聖者—史実と願望の記録—」、臨川書店、二〇一九年、九三—一〇〇頁。

32 是大涅槃微妙経中、有四種人。能護正法建立正法憶念正法。…中略…何等為四。有人出世具煩惱性、是名第一。須陀洹人斯陀含人、是名第二。阿那含人、是名第三。阿羅漢人、是名第四。是四種人出現於世。(大正一二・六三七上)。

33 船山徹「二〇〇」前掲書、一三八頁。

34 莊嚴家云、「十住論」云初地断見諸尽者、此意正言能断見諸、不言都尽也。如須陀洹得見諸尽必至涅槃、以譬初地得生仏家、故生歡喜。少分為喻、不言初地見諸惑都尽也。如「十住論」中、亦以初地已断三界思惟。何令初地思惟都尽耶。故知言断(見)諸縛而未尽也。(『四論玄義』二七〇頁)。

傍線部は「十住毘婆沙論」「如是得初果者、如人得須陀洹道。…中略…菩薩如

是得初地已。名生如来家」(大正二六・二五下―二六上)からの要約である。第二箇所『十住論』の出典は未詳。

35 宝亮はいう、阿羅漢は三界の煩惱を断ち切るが、習気はまだ除去されていない。これをもって十地菩薩をみるに、十地菩薩も色(物質)・心(精神)に関する龐大な煩惱を断ち切るけれども、色心(物質と精神の煩惱が)集合生起する根源はまだ断ち切られていない。

36 『大智度論』得阿羅漢時、三界諸漏因縁尽。更不復生三界、有淨仏国土出於三界、乃至無煩惱之名。(大正二五・七一四上)。

37 船山徹『二〇〇〇』前掲書、一三九頁。

38 「煩惱を破す三種」というのは、旧来、二つの見解がある。第一は、二国煩惱である見諦惑・思惟惑の二つ(の煩惱を破すこと)であり、それは三界内の穢土煩惱(を破すこと)である。「見・思の」余力(習気)が淨と穢の二国中間(に位置する煩惱を破すこと)である。淨土の煩惱となる無明住地(を破すこと)は三界外の煩惱(を破すこと)である。第七地菩薩が二国中間の煩惱を断ち切るというのは、莊嚴寺僧受の見解である。第二の見解は、見諦惑(を破すこと)が第一の煩惱(を破すこと)であり、思惟惑(を破すこと)が第二の煩惱(を破すこと)であり、習気(を破すこと)が第三の煩惱(を破すこと)である。無明という根源的段階(元品)(に基づく)全段階は習気(の全段階)と同じなので別に説かない。初地から第三地までは見諦惑を断ち切り、第四地から第六地までは思惟惑を断ち切り、第七・第八の二地は共に習気と無明を断ち切る。これは開善寺智蔵の見解である。

39 見諦惑・思惟惑を断じ、阿羅漢位に達するという例は、法雲説『法華義記』にある。

声聞乘人、聞仏説法、進入無相行、見諦思惟、治道断結也。「是名声聞乘」、是第四階。即合上第四階「淨出火宅」得羅漢果也。(大正三三・六二四上)。

40 問三退退相何耶。答、行退者、已伏煩惱種類、更暫起、名為行退也。位退者、退起作二乘位心、名為位退也。念退者、七地初忍菩薩所未断煩惱來現前、名為念退。(『四論玄義』二九一頁)。

41 念退者、如『十地經』云、七地菩薩愛仏功德、不名無煩惱也。『華嚴』亦云、

三界煩惱尽故、不名有煩惱。愛仏地功德故。不名無煩惱。故念退也。今正取未断煩惱來現前、名為念退也。(『四論玄義』二九二頁)。

42 問う、七地の菩薩は已に修行が深い。どのような意味で退転の念を起すのであろうか。答える、諸(成実)論師の見解は同じではない。第一に、開善寺智蔵の二乗は(次のように)いう。単に(小乘機根の衆生)を引導するために、「声聞乘と辟支仏乘という」名字のみの二乗があることを説明する。それ故、『勝鬘』經に「阿羅漢に生まれる・辟支仏に生まれる・大力菩薩に生まれるという」三種の意生身がある」と説いている。如何なる者が空を知解し一切の修行(を行い尽くすこと)によって(利他行に)資するか。「もしそれが」一切の修行を行い尽くさない二乗の人と同じならば、どうして空を知解し三界の惑を断ち切り、三界の外に脱出することができようか(できない)。更にまた、この菩薩は既に正使(煩惱の本体)を滅尽し、やっと始めて三界の内から脱出しても、空・有の二諦を共に觀察することはまだできない。このような鈍根の菩薩は、仏地の功德への愛着を起すこともあるし、空に安樂に住しえずむこともある。

43 引接と二乗の議論は、智蔵以前の僧宗説(『大般涅槃經集解』)にあった。

僧宗曰。根有大小、悉有広狭。世無大心衆生、為説常果。令作仏者、非無權説、二乗得二滅也。以其志小、權説引接、得知虚果未極。何容責使同仏涅槃耶。又釈若世間、都無作仏理者、非無二乗得二涅槃。理既不爾。故知二乗權設小果、何得同仏耶。(大正三七・四七二中)。

ここは二乗の志が小であるため、權(方便)を説いて大果(＝仏涅槃)へ引接するといふ。

44 二開善亦云無二乗、而文小異靈味者。開善前後説小不同。前云始入内凡得仮名空已、或並是実声聞。但從法空已去、唯義為声聞。凡引十証、如後説亦改云、亦無復仮空声聞。…中略…空捨捨權、仮為義也。明実理無二乗、仮名字説二乘也。故『法華經』「方便品」後偈言、「十方仏土中、唯一乘道、無二亦無三」也。「無二」無第二辟支仏乘、「亦無三」無第三声聞乘。但以仮名字、引道(導)於衆生、權仮釈權明證也。(『四論玄義』五二六頁)。

45 執無有二乗亦少不同。一但起自靈味寺小亮法師云。理中唯有一菩薩乘。無別

二乗。而説有者。為欲引接二乗。如雀母方便説也。二開善亦云無二乗、而文小異靈味者。…中略…。開善執定（実か）權義也。実権者、実有如法根性人也。明法二乗人歳計必応作仏、但逐根性暫時権爾。（『四論玄義』五二五—五二六頁）。

傍線部の示したように、智蔵は二乗の根性を暫時的な存在とし、実に如法の根性人であり、二乗の人が必ず作仏すると主張している。

46 第二は、実行の二乗家がある。すなわち莊嚴寺僧旻の一門は（次のように）いう。ただ単に鈍根であり、（衆生を救済する）方便を供えていないだけが、仏地の功德に愛着するのではない。声聞等の二乗もまた、三界の正使（煩惱本体）を断ち切り、滅尽し、変易生死（清浄な地に）往生してから輪廻に戻ってくる（と）、その時、「彼らもまた」仏の無量の功德を聞けば、直ちに仏地功德への愛着も生じるのである。更にまた、この菩薩が正に（衆生を救済する）行を起こしそれを明らかにしても、初地から第六地まではまだ退転がある。何故ならば、正使（煩惱の本体）がまだ滅尽せず、万行も精進しがたい状況にあるからである。…中略…。報恩寺の法師もこの説と同じ見解である。

47 彼経言、開方便門示真相也。夫人経亦説意。声聞辟支仏者是仏方便。於今望昔、則昔説三、是今一之方便。今一是昔三之真相。則就一乘三乘開為權実也。与一乘之果歸於仏地。（『四論玄義』四四七頁）。

48 岡本一平氏の指摘したように、六世紀の北朝では、地論学派の法上（四九五—四八〇）の「釈教述義」や慧遠の『勝鬘義記』に「決定声聞」（大乘に趣向できない声聞）の一分不成仏説が確認できる。また、地論教学に先行する南朝仏教では、既に「明三乘行人同歸成仏」（法雲説『法華義記』、大正三三・五八二中）と論じられる。次の論考を参照。岡本一平「浄影寺慧遠の二蔵説の形成—達摩鬱多羅「釈教述義」と慧遠「勝鬘義記」—」、「東洋学研究」五四、二〇一七年、一一二—一六頁。菅野博史「法雲『法華義記』における一乘思想の解釈について—権実二智論と因果論—」、「創価大学人文論集」四、一九九二年、三一—二〇頁。更に『四論玄義』に智蔵の名字「二乗と僧旻の実行二乗が述べられている。智蔵と僧旻の二乗成仏については検討の必要がある。

49 聖徳太子撰と伝える三経義疏は南北朝期の成実学との繋がり指摘されている。

る。岡本一平氏によって光宅寺法雲の思想に基づいて成立した『法華経義疏』と、三論学派の思想に基づいて成立した『維摩経義疏』と、判断に困難な『勝鬘経義疏』であるといわれる。岡本一平「凝然『勝鬘経疏詳玄記』の研究—成実教学を中心として—」、「駒沢大学仏教学部論集」二九、一九九八年、三四六—三五八頁。また、金治勇氏は太子の『勝鬘疏義疏』に影響を与えた奈九三が僧旻の『勝鬘経』注釈書であると提示している。一つの理由は、四種生死（分段・変易・中間・初流来）に関わる二国中間を、僧旻が説いているからである。金治勇「敦煌発見の勝鬘経疏（奈九三）と勝鬘経義疏との比較研究（二）—主としてその学系について—」、「印度学仏教学研究」一九（一）、一九七〇年、二七〇—二七三頁。本稿は、変易生死を第八地に置く学説は法安の「十地義」にあると提示する。

50 大竹晋「二〇一七a」前掲書、一五五—一七四頁。

51 今所言菩提心者。即是初地僧祇行滿。現見真如所証無生法忍。以此為菩提心也。随分証得無為法身。即是果菩提也。（大正二五・八〇五上）。

52 浄土有二種。一是地前、有為形相七宝莊嚴、三界所撰。二是地上、出世間浄土第一義莊嚴、非三界所撰。以初地以上聖人報出三界土也。（大正二五・八二六下）。

53 『金剛仙論』には、小乗の三界煩惱を断じ、分段生死を出る果と菩薩地と対応付けは五つの間違った認識が説かれている。その中、第七地と第八地の二説は以下のようなものである。

復有一家薩婆多中日出道人計、第七地中始得無生忍、方尽三界煩惱、出分段生死、同已小乗、捨於身智亦無依報浄土。復有一家小乘計、至八地中得大無生忍無功用解、爾時方出三界、捨於身智一切皆失。（大正二五、八六四下—八六五上）。

54 『統高僧伝』僧旻伝…又於簡靜寺講『十地経』（大正五〇・四六三上）。

55 拙稿「二〇二〇」前掲書。

56 『四論玄義』を転写する間、塵を難として誤写したのではなからうかとも考えられる。

57 『成実論』の題号を『誠実論』と記す写本例は、杏雨書屋蔵羽一八二『誠

実論義記』巻第四、北魏延昌元年(五二二年)写S一五四七『誠実論』巻第十四、同三年(五一四年)写P二一七九『誠実論』巻第八などが指摘されている。池田将則「天津市芸術博物館旧蔵敦煌文献『成実論疏』(擬題、津芸〇二四)と杏雨書屋蔵敦煌文献『誠実論義記』巻第四(羽一八二)」「杏雨」一七、二〇一四年、注記一七。

58 拙稿「二〇一〇」前掲書。

59 『経』には「明」の名称と意味を解釈している。いわゆる、知る対象があるので「明」と名付ける。何れの法を知るかといえば、色陰が無常であると如実に無常を知る。また受・想・行・識の陰が無常であると如実に無常を知るのである。「明」と相違するものを「無明」と名付ける。すなわち、如実に明らかにしないことを、無明と名付けるのである。

60 大竹晋「二〇一七b」前掲書、四一九頁。

61 智蔵の『成実論大義記』の構成に「五陰義」「十使義」「見思義」が立てられると指摘されている。船山徹「二〇〇七」前掲書。これを参照すれば、「五陰義」は『成実論』研鑽の一つの課題であろう。僧旻も五陰義を解釈したと想定できる。

62 『成実論』の文は「五受陰」を説く。陰は五つあるといっても、色と心の二法に集約することができる。色・心にとられるので大苦の聚集となり、あらゆる煩惱に遍在し、苦の体となる。色・心を除けば、始めに安樂を体験し得ることが出来る。よって、五陰があらゆる煩惱に遍在することを苦の元となる。…中略…。悟らない者たちは生死(輪廻)という苦しみの海に沈む、実に五陰法の積聚が智慧を覆蔽するので、それを陰となし、陰は別々で同じではないので五つを立てる。五陰は大別すると二種である。一つは色、もう一つは心である。色は「物質の」障りであり、専ら苦を生じるので一つ「色陰」を立てる。一方、心(精神)の用(はたらき)は、尊重すべきものである。何故なら、煩惱を断ち切り智慧を生じるからである。また、つぶさに様々な善悪の業を引き起こす。その功は心に基づくので、受・想・行・識の四陰に分類して立てるのである。

63 池田将則氏が整理したP二二八三録文、注記一四四。(『蔵外地論宗文献集

一 成』七八頁)。

64 吉蔵の『金剛般若経義疏』は、開善説(智蔵注『金剛般若経義疏』散逸)を批判的に引用している。定源(王招国)『敦煌本『御註金剛般若経宣演』の文献学的研究』、大東出版社、二〇一三年、一一頁。

65 開善寺智蔵の教義については、惑を屈伏させるのは既に周く行われ、更にまた無明元品惑を最も屈伏させ難い。唯一、学を極めた者の心だけがそれを屈伏させることができ、仏果に至って仏智が起きてこれを断ち切る。この意味で学を窮めた者の心を金剛(心)と名付ける。

66 七地以上で断ち切り、滅尽する惑には三種の性があり、異なる。一つは、総合的な無知(総痴)である無明住地の九段階である。二つは、無知の九段階である。三つは、習気の九段階である。此の三種の本性が一の除道において屈伏させ、断ち切る所である。洄河の沙の数ほどの「無数の」色塵等の五種(五陰)は、無明・無知・習気の三種「性」(のどれか)に収められる。それ故に三種の性を立てるのみである。

67 名目の立場で三種「性」を論せば四種(色塵無知・心塵無知・集起無知・無始無明)となる。若し断伏せば、第七地で恒沙上の煩惱を断じ、「兼ねて」色塵無知を屈伏させる。第八地で正(主)に色塵無知を断じ、「兼ねて」心難無知を屈伏させる。第九地で正(主)に心難(塵)無知を断じ、「兼ねて」集起無知を伏する。第十地で正(主)に集起無知を断じ、無始無明(無明元品)を屈伏させる。余の二つ性質の習気・痴の無明がともに中にたくわえるから、並びに断・伏するといふのである。

68 一、四住煩惱、為煩惱障、無明住地、以為智障。(大正四四・五六二下)。
69 起伏難明、非喻不曉。故寄風水波浪然後悟。水以譬心、風況塵境、煩惱喻浪。以塵境之風、鼓扇心水、煩惱之波、於茲而起。生死之根、因是而生。起浪之体、先微後著、浪滅之方、先著後微。…後略。(『蔵外地論宗文献集成』九九頁)。

70 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝経』(『四卷楞伽経』)巻一…譬如巨海浪、斯由猛風起、洪波鼓冥冥、無有断絶時、蔵識海常住、境界風所動、種種諸識浪、騰躍而転生。(大正一六・四八四中)。

71 『楞伽經』と「断肉食」については、京都大学人文科学研究所船山徹教授のご教示に厚く御礼申し上げる。また、南朝ではもう一つの唯識文献『菩薩地持經』（『瑜伽師地論』の部分訳）の影響は、次の論考を参照。船山徹「六朝時代における菩薩戒の受容過程―劉宋・南齊期を中心に―」、『東方學報』京都六七、一九九五年、一九五頁。このように、唯識文献が南朝仏教に受容されたが、心識説の展開はまだまだ不明である。

72 大竹晋「二〇一七」前掲書、四二二頁。

73 天台は藏・通・別・円の化法四教を立て、教えの優劣を付ける。中では、通教菩薩が果頭無人の仏位に至り、天台教学における究極的な真理である諸法実相を体得するために、より優れた別教や円教へ転入可能性がある。断惑論に基づいて、天台の行位説に「被接義」が立てられる。次の論考を参照。若杉見龍「「被接」について」（『棲神・研究紀要』五〇、一九七八年、二八―四二頁。張堂興志「被接における二、三の問題―増強の扱いをめぐって」（『天台学報』四五、二〇〇二年、一二五―一三二頁。

74 塩入良道「天台行位説形成に関する諸問題―藏教と通教について―」、『大正大学研究紀要』五四、一九六八年、二五―五二頁。この論考では七地八地での観常住・破無明は地論師説ではなかろうかと推測された。本稿は成実涅槃師の学説であるという説を提示する。法安と僧旻は第八地で無明住地を断ち切るといい、智蔵は第七地・第八地で並びに習気と無明を断ち切ると説いている。また、灌頂の『大般涅槃經疏』は「旧有二解」の僧旻説・智蔵説を引用した後、「今明、七地修方便、八地道観双流、破無明見仏性者、此以別接通。是一種破煩惱得見仏性」（大正三八・一七九下）と述べている。要するに「別接通」の理論展開は僧旻・智蔵の断惑論を土台にしたと考えられる。

75 吉蔵撰『法華玄論』…若二乘断惑齊六地者、無有是处。二乘極久、唯六十劫或百劫。菩薩至六地時、二十二大僧祇劫。（大正三四・四二七中）。